

キスのおくすり

* * * * *

授業が終わって、美空中からの帰り道。オレはいつもと違う道を歩いてた。

家に帰るのとも、河原に下りるのとも違う、いつもは通らない坂道。そこをしばらく歩くと、古い家が見えてきた。坂道の途中、一段低くなってるところ。

「はあ」

息をついてから、あれ、と思った。ついこの間までは目の前が白くなったのに、今はよっぽど早起きしてもそうならない。まあそうか、あとちよつとで春休みだもんな。

「もつ中3、か」

軽く伸びをしたはずみで肩にかけてるバッグがずれたのを、オレはあわてて抱きとめた。中のトランペット、こんなドジで壊しちゃたまらない。

ドジ、か

オレはまた、古い家を見た。坂から階段を降りてくと、だんだん大きくなっていく家。その玄関から、丸めがねの小さなはづきが飛び出してくるような気がする。

「ずいぶん、ドジやってたよな。ここで」

思わず顔が崩れるのが自分でわかる。けど、それのため息ひとつでもともにもどつちまった。

「それが、いまじゃあ」

頭を振って目を上げると、すぐそこに古い家。表札もなにもないけど、2年前まで屋根に看板がかかっていたんだ。

『MAHO堂』っていう、看板が。

3 キスのおくすり

玄関のドアノブを回すと、すつ、と音もなくドアが開いた。鍵もかけないなんて、無用心だな　まあ、普通の家じゃないのはオレも知ってるけどな。

MAHO堂にいた巻機山たちが引越して、もう2年。いまじゃ空き家になったこの家には、ほとんど人が寄り付かない。オレだって、はづきがたまに入っていくのを見たことがあるくらいだ。

一心、内側から鍵かけて、オレは部屋の奥に向かった。知ってる場所はそんなに多くない。目的地は奥にあるとびら　部屋の間取りを考えりゃ、外に出るだけのとびらだ。

けど、そのとびらの前にはクッションが置いてある。オレはそこに座って、とびらに背中をあずけた。

「この先が、伊豆なんだよなあ」

コンコン

指で叩いても、軽い音が返ってくるだけ。だけど、オレはこのとびらを通ってこの家に出てきたんだ。なん百キロも離れたところから。

コンコン

もう一度とびらを軽く叩いて、オレは苦笑いした。特別な条件がそろわないと開かないとか、はづきも言ってたのに。なに期待してんだろな、オレ

「Hello　はづきちちゃん？」

な!?

「う、うえあああー！」

な、なんだ、なんだ!?! ああ、ええと、たしかこんなときは　そ、そうだ!

「マジヨリカマジヨリカマジヨリカマジヨリカマジヨリカマジヨリカ　!!」

あとで考えると間抜けだけど、このときのオレには逃げるって考えがなかった。その場で両手合わせて、ずっと前にはづきから教わった呪文となえて　そ

したら、声が聞こえてきたんだ。

「ほえ？ あ、それってたしか前に、はづきちゃん
んが だトすると。そっか。

ひよっとして、矢田クン？ そこに居るノ」

え？

自分の名前呼ばれて、一瞬頭の中が空っぽになった。
空っぽの頭に、さっきの音がしみてくる。

聞き覚えあるぞ、この声。それにこのイントネーション。ずいぶん前だけど、今でも覚えてる。これは

「飛鳥あすか か？」

「Yes! ひさしぶりだね、矢田くん」

とびらの向こうから、飛びついて来そつなくらいの
声が響いてきた。こいつも、変わってねえなあ。日
本語に英語が混じってるのもあいかかわらず っと、
そりゃそっか。

「ああ、久しぶり ってことはいま、このとびら
アメリカに繋がってるのか？」

「うん Wow! Wait a moment! ちょ、ちょっと
待ってー」

なんだ？ 明るい声がいきなりあわて始めたぞ？

ああ、そっか。そうだったっけな。

「心配なくていい。オレ、知ってるから。」

こないだ、伊豆のリリカおばあちゃんのペンションから、とびら通って帰ってきたからな」

このとびらがどこかに繋がってるのは、普通じゃないんだ。まいったな。はづきの常識にオレも染まっちゃってるよ。

お、向こうで思いっきり深呼吸してる音がする。ちょっとは、落ち着いたかな。

「そうなんだ。はづきちゃんも、知ってるノ？」

「ああ、はづきに教えてもらった。それと、オレはこれがなんなのかは知らねえし、はづきにも訊いてない。言っちゃヤバいことなら、言わなくていいからな」

5 キスのおくすり

言いながら、オレは小学生の頃を思い出した。秘密基地つてのは、勝手に暴いちやダメだよな。

ん？ なんか向こうから、クスクス笑い声が聞こえてくんぞ？

「あはハ ああ、ごめんネ。昔の矢田くん、ワタシたちにははづきちゃんのこと『藤原』って呼んでいたの、今は『はづき』なんだもん。ちょっと、面白くッテ」

オレは思わず、手で頭おさえた。そうだった。こいつは妙などこ気が回るヤツだったっけ。

はあ。まあ、いいか。春風じゃねえし。

「べつに。2年もすれば、呼び方だって変わるさ」「ふ~~~~ん？」

なんか、言いたそうな声だな。ああ、そうだ。

「はづきなら、今日は用があるから来ないって言うたぞ」

だから、オレは来たんだもんな。

「そうなんだ。Thank you でも矢田くんは、今

日なんでここにいるノ？ わたしが居るなんて、知らなかったンでしヨ？」

「ああ、そりゃあ」

言いかけて、口が勝手に閉じていった。

ごまかす気になればいくらでも言える。けど、オレはそんな気になれなかった。なんとなく、だけど、いま飛鳥と話してるのは偶然じゃない気がする。

それに、どうせ日本とアメリカだ。顔合わせるヤツより、騒がれる心配もない。

オレは胸に手をあてた。ペット吹くつもりで息を吸い込んで よし。

「実は、逃げてきたんだ。はづきから」

ニューヨークのMAHO堂。そのとびらによっかかって部屋を見回しながら、わたしは矢田くんの言葉聴いてた。

「逃げたノ？　はづきちゃんから？」

「タオルケットじゃ、まだ少し寒いな　なんて思
いながら、とびらの向こうで答えてくれるまで、ホッ
トチヨコをひとくち飲み込んで、」

「Why? 逃げるなんて　」

静かに訊ねて、また黙ってみた。

「さっきの声、すっごく小さいけど、真剣な声だっ
たな。だから、わたしも真剣に聴かないといけない
よね。たとえ」

「あいつ　最近、きれいなんだよ。化粧とか始め
たみたいで　近づくと、いい匂いがするしな」

たとえ、聴いてて体がかゆくなっても。

「オレはあんま、化粧とか香水とか好きじゃないん
だけど、あいつがつけてると、こう　ああっ、う
まく説明できねえなあ」

でもまあ、それも限度はあると思っただ、わたし。

「矢田くん」

「ん？」

「キスとか、したア？」

「できるだけ、のんびりした声で言ったら、とびら
の向こうからむせた音が聞こえてきた。

それじゃ、もうひとつ。

「はづきちゃんと、キスとか、したあ？」

「い、いや　その、べつに　あれば、キスとか
言っても、その　」

「したんだ」

矢田くん、ちょっと黙っちゃったみたい。

「わたしはまたホットチヨコをひとくち飲んだ。の
どから下にあったかいいのが流れていく。

「ア、アメリカでもするだろ？　そっちじゃ、挨拶が
わりに誰にでもキスするって言っじゃないか!!」

「Nonsense! それ、偏見だヨー！」

「あ、いつけない。ちょっと強く言い過ぎちゃったか
な？　でも、ひどい誤解だもんね。」

「そう、なのか？」

「Yes! パパやママと、ほっぺとかおでこにはよくあ

7 キスのおくすり

るケド、挨拶でくちびるにはしないヨオ」

また言葉をのんびりに戻してみたけど あれ？

黙っちゃったな？

「オレも、それだよ」

またカップに口つけようとしたとき、やっと答えが返ってきた。

「キスしたって言っても、ほっぺたにしかしてねえよ。それも、春風と小竹に乗せられてな！」

ふう。 やつと言ってくれた。そういえば、どれみちゃんがこの前そんなこと言ってたっけ。

それじゃ、まとめてみようか。

はつきちゃんがきれいになって、近くに来るといい匂いで、キスはしたけどほっぺにだけ。

だけ、か。ふうん。

「なぐんだ。はつきちゃんと、ちゃんとキスしたイんだ、矢田くん」

ダンッ！

言ったらいきなり、とびらから大きな音が響いてきた。叩いたのかな。

「おかしいんだよ、もう！ あいつがそばに近づいて来るたびにキスしたくなるなんて。これじゃ変態じゃないか!!」

変態 ね。

「だから、このとびら開けられるリリカおばあちゃんなら、なんていうか そういうの抑おさえる呪文とか薬とか、知ってるんじゃないかと思ってさ」

それで、呪文にくすり、かあ はあ。

扉の向こうに聞こえないように、わたしはため息をついた。

思ってたより、重症みたいだね。 矢田くん。

夕日でオレンジ色の部屋の中で、オレは手のひらさすっていた。

ちつき、思いっきりとびら叩いちまったもんなあ

おお、痛て。

「デさ、矢田くん。それ、なにがいけないノ？」

ちよつと痛みが薄くなってきたな、と思っていたとき、とびらの向こうからまたのんびりした声が聞こえてきた。

「いや、なにがって こつ わかるだろ？」

「I can't understand わからないヨ。だって矢田

くんは、はづきちゃんときあってるんでしょ？」

けるつとした声で言うもんだから、オレは思わずくちびるに力が入っちゃった。

そつだよ。1年ちよつと前のクリスマス、はづきの通ってるカレン女学院のパーティに一緒に行ったら、唯一の男女ペアでの参加ってことで それか

ら美空中でも公認になっちゃったんだ。

けど、あとではづきに訊いたぞ。それ全部、

「お前らのせいだろ？」

思い出したら、腹の中が嫌な感じになってきたじゃないか。

「後悔してる、とか、言わないヨネ？」

すこく小さい声が聞こえてきて、オレは思わずため息ついた。

わかっている。わかっているだよ、悪気ないってのは。

特に、飛鳥トビトリは はあ。

「してねえ。けど、感謝する気もねえからな」

「いいヨ。はづきちゃんが幸せだったら おつ、話そらしちゃダメ！」

つきあっているGirlfriendとキスしたいのって、当たり前のことじゃないノ？」

飛鳥の言葉聞いてたら、顔が熱くなってきた。つきあつつきあうって、繰り返して言うなよ、こいつは。「好きなもんが近くに來たらかぶりつく、なんて、春

9 キスのおくすり

の犬や猫じゃないか」

言ってる途中で、クスクス笑ってる声が聞こえてきた。なんかイラつくな。

「じゃあ、たとえば。はづきちゃんの中身がわたシだったら、キスしたい？」

はづきちゃんと同じ顔で、同じ匂いで矢田クンに近づいたら」

「絶対、しねえ」

言ったのがオレだって、しばらく気がつかなかった。飛鳥が言い終わる前に、勝手に口が開いてたんだから。

「そうソウ、こうやって話すくらいには嫌いじゃないわたくしでも、ネ？」　ホラ、もう答え、言ってるじゃない。

矢田クンは犬や猫じゃないヨ。矢田クンは、好きなのはづきちゃんだけキスしたい、人間だモン♡」

クスクス笑う飛鳥の声。さっきと同じはずなのに、さっきより柔らかい感じがした。

「ふわ　ア」

なんだ？ 妙に眠そうだな。ああ、そついや、飛鳥がいるのはニューヨークだったつけ。時差は、たしか14時間　ちよつと、待てよ？

「飛鳥。おまえ、なんで起きてるんだ？ こつちが夕方の5時ってことは、そつちは真夜中の3時じゃないか？」

「あ、あははハ。バレちゃったネ？」

というわけデ　オ、い、聞こえタ？」

ん？ な、なんだいきなり？

「聞こえてるから答えてンだろ？ なに言ってる」

「No, It's not such meanin'」　ア、ん、矢田クンに言ったわけじゃないよオ

「聞こえた？ はづきちゃん。」

「なに!？」

「がばつと起き上がったって周りを見ている。ソファーにテーブル、隣のキッチンの中、どこにも、誰の気配もないぞ?」

「ちよ、ちよつと待てよ! ここにはオレしか」

「そこじゃないよ。ほら、はづきちゃん。聞こえてたんでしょ?」

「なんで」

「ほんの一言だけだけど、俺の耳に聞きなれた声が響いた。この声、間違いない!」

「はづき!？ お前、いったいどこに」

「言いかけた途中で、とびらからコンコン、って音が響いてきた。」

「あハハ。このとびらネ、繋がってるのはアメリカカとリリカおばあちゃんのトコだけじゃないヨ。はづきちゃん、今日はおんぷちゃんの事務所に居るんだっ

「たヨね?」

「もあつ! なんて言っちゃうのよ、ももちゃん!!」

「今度のはづきり、はづきの声。確かにとびらの向こうで、飛鳥と違う場所から聞こえてくる。これが、はづきの今日の用事だつてえ!？」

「しょうがナイじゃない? 矢田クン、こんな真剣に悩んで話してくれてルんだモン。はづきちゃんだけ隠れて聴いてルなんて、フェアじゃないヨ」

「さア、あとは恋人同士で話し合つてネ。わたシ、もう聞かないで寝ちゃうから。それジャ♡」

「一気にまくし立てた声が消えると、いきなり、静かになった。」

「ええと まさる、くん?」

「静かな中に、はづきの声だけが小さく響いてるつてつもりか、飛鳥。」

「はづき、ちよつと待って」

「じつと耳を澄ますと、聞こえてんぞ、ほんのちよつ

11 キスのおくすり

とだけ息の音。わくわくしながら聞いている雰囲気。

「聞いてないって…誰が信じるかあつ!!」

—おしまい—